

「ナイトウォーク」

作 荒畑 美貴子

ぼくたちの学校では、例年夏休みに入るとすぐに、八ヶ岳の宿泊施設で自然教室が行われます。六月下旬、ぼくたち自然教室実行委員は、イベントの計画の確認をしていました。そのとき話題となったもののひとつが、ナイトウォークをどのように行うかということでした。暗い林の中を二人組になって歩くという単純なものですが、街灯のない道を歩くのはとても怖いのだと、二年前に自然教室に参加していた兄から聞かされていました。

委員会の終盤になって、ようやくナイトウォークの話題になると、実行委員は口々に勝手なことを言い始めました。

「ナイトウォークのパートナーをどうやって決めたらいいのかな」

「去年の六年生は、くじ引きで決めたらいいよ」

「やだ、誰と組むかによって、思い出が違ってくるでしょ。やっぱり自分の好きな相手と歩きたいよね」

「えっ、誰が好きなの？」

「そういうことではなくて、嫌いな人とは組みたくないっていうことだよ」

「そうだよね、同感！」

このような声はとどまることなく、しばらく続きました。すでに下校時刻が過ぎており、気持ちに焦りが出てきたぼくは、話を遮るように発言しました。

「くじ引きにしようよ。そうすれば仲間はずれになる人もいないし、みんなが楽しくナイトウォークに参加できるよね」

すると、思ってもいなかった言葉が返ってきました。

「ほらね、いつもいい子ぶってるんだから」

「そうそう、優等生はいいよね。成績のためなら、誰とでも仲良くするんですよ」

「そういうことじゃなくて……」

「いいいいいいよ、言い訳しなくても」

そんなことを言い合っていると、先生が教室に入ってきました。

「話し合いは進みましたか」

決まった内容を説明した後、代表の小夜子さんがぼつりと付け加えました。

「ナイトウォークのパートナーをどのように決めるのか迷っているんです」

「わかりました。では、次の実行委員会では、パートナーの決め方から話し合いを始めるといいですね」

先生は、ぼくたちの言い合いに気づくこともなく、これから会議があるからと職員室に戻って行ってしまいました。

帰り道、友達から優等生ぶっていると言われたことがショックで、自分の何が悪かったのだろうと考えながら歩きました。でも、よくわかりませんでした。ただ、それ以降は実行委員会ばかりではなく、学校の中では発言するのをひかえようと思いました。